『大鏡』における藤原道長の理想性・序説

――栄華の相対的評価をめぐって――

福田景道

一

大宅世次は、『大鏡』の昔語りを開始するにあたって、「たゞいまの入道殿下」藤原道長の「ありさま」に主要な関心があることの言明を繰り返す。『大鏡』の核心には道長があり、道長の栄華が『大鏡』という作品を成り立たせるとも言える。(1)

Ⅰとしごろ、「むかしの人にたいめして、いかでよの中の見きく事をもきこえあはせむ、このたゞいまの入道殿下（道長）の御ありさまをも申あはせばや」とおもふに、（下略）　（「総序」三五頁）(2)

Ⅱまめやかに世次が申さんと思ことは、ことぐかは。たゞいまの入道殿下の御ありさまの、よにすぐれておはしますことを、道俗男女のおまへにて申さんとおもふが、いとことおほくなりて、あまたの帝王・后、又大臣・公卿の御うへをつゞくべきなり。そのなかにさいはひ人におはしますこの御ありさま申さむとおもふほどに、世の中のことのかくれなくあらはるべき也。つてにうけたまはれば、法華経一部をときたてまつらんとてこそ、まづ余教をばときたまひけれ。それをなづけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかのごとくに、入道殿（道長）の御さかへを申さんとおもふほどに、余教のとかるゝといひつべし　（同三九頁）

Ⅲ帝王の御次第は、申さでもありぬべけれど、入道殿下の御栄花もなにゝよりひらけたまふぞと思へば、先みかど・后の御ありさまを申へき也。うゑきは、根をおほして（おほくて イ本）つくろひおほしたてつればこそ、枝もしげりて、このみをもむすべや。しかればまづ帝王の御つゞきをおぼえて、つぎに大臣のつづきはあかさんと也（「へき」「て」は見せ消ち）　（「天皇紀跋」五八頁）

世次翁の意図はここに端的に表れる。「帝王・后」を対象にする「本紀」も、多くの「大臣・公卿」に言及する「列伝」も、結局は道長一人の栄華を追究するために設置されたもので、「余教」や「根」として機能すると断言するのである。『大鏡』に登場する人物すべてが道長の「ありさま」を解明するために奉仕するということになるのかもしれない。

実際に、これらの揚言に即応して『大鏡』の摂関時代史が展開していると考えられる。元来、「天皇本紀」も「大臣列伝」も、「藤氏物語」ま

でもが道長の栄華が導き出されるように考案されたものであった。[3] ほとんどの記載事項が道長の理想的な人生に求心的に統一されると見なすこともできる。[4] ところが、そのように重大な「道長の栄華」がどのような実相を持ち、どのように認識されているかは必ずしも明白ではない。これは一面では、『大鏡』には栄華の究極に至り着く過程に主眼が置かれ、[5] 栄華が享受される様相は多く『栄花物語』に委ねられるという偏向によると思われる。栄華そのものを描くことに『大鏡』はそれほど熱心ではない。しかし、そうは言っても、『大鏡』中に「道長の栄華」が認識されていないはずがない。その空前の栄光は、実態が把捉されたうえで由来が追求されたのではないだろうか。このことは世次の発言を通しても看取できる。

Ⅳ「世間の、摂政・関白と申し、大臣・公卿ときこゆる、いにしへいまの、みなこの入道殿（道長）の御ありさまのやうにこそはおはしますらめ」とぞ、いまやうのちごどもはおもふらんかし。されども、それさもあらぬことなり。いひもていけば、おなじたね、ひとつすぢにぞおはしあれど、かどわかれぬれば、人〳〵の御こゝろもちゐも又、それにしたがひてことぐ〵になりぬ。（「総序」四〇頁）

Ⅴ世次はいとおそろしきおきなに侍。真実のこゝろおはせむ人は、などかはづかしとおぼさゞらん。世中をみしり、うかべたてゝもちてはべるおきな也。目にもみ、耳にもきゝあつめて侍るよろづの事のなかに、たゞいまの入道殿下の御ありさま、いにしへをきゝ、いまをみ侍るに、二もなく三もなく、ならびなく、はかりなくおはします。たとへば一乗の法のごとし。御ありさまの返〻もめでたき事也。よのなかの太政大臣・摂政・関白と申せど、始終めでたき事はえおはしまさぬ事也。法文聖教の中にもたとへるなるは、「魚子おほかれど、まことの魚となる事かたし。菴羅といふゑ木あれど、このみをむすぶ事かたし」とこそはときたまへなれ。天下の大臣・公卿の御なかに、このたからのきみのみこそ、よにめづらかにおはすめれ。いまゆくすゑも、たれの人かゝばかりはおはせん。いとありがたくこそ侍れや。たれも心となへてきこしめせ。

（「大臣列伝序」六〇頁）

このように、古今の権力者と道長を対比することにも語り手世次の目標は定められていたのである。[6] 道長の栄華は史上の摂政・関白・太政大臣などの頂点を極めた誰よりも圧倒的に優ると断定されている。

Ⅰ～Ⅴはいずれも、世次の熱意から発せられた、『大鏡』の主題に関る重要な言辞に違いない。そこでは道長の栄華が言葉のかぎり称揚される。しかし、賛辞が重ねられるだけで、道長がどのようにすぐれているのかはここからは読み取れない。それは作品世界の展開の中でおのずから明らかにされていくはずである。ここに本稿の目的がある。『大鏡』の本質や『大鏡』における道長を考究するために、まず、『大鏡』に表現される道長の栄華の実情を検証してみたい。

二

『大鏡』に描かれる道長が王朝貴族社会における最高・最大の人物として把捉されることは否定のしようがない。一つの時代の価値観や美意識が道長という一個人に理想的に集中し、典型的に具現していると言っても過言ではないであろう。

『大鏡』の多彩な逸話群から抽象される道長像には、たしかに、その

栄華を必然・当為のものと承服させられるほどの理想的個性が付与されている。「道長伝」には、豪胆な精神・人間的意欲[7]によって道長が当面の競争相手である道隆・道兼・公任・伊周らを圧倒し尽くす様子が重層的に描き出され、「道隆伝」や「道兼伝」には伊周・道兼等の人間性が道長に到底及ばないことが例証されるのである。強靱な意志の力で道長自らが奇跡的な成功を招き寄せたという思いを抱かないではいられない。それに加えて、道長は、実姉詮子女院に徹底的に庇護され（「道長伝」）、神仏にも加護され（同）、天地に容認され（「藤氏物語」）、観相によって大成が保証される（「道長伝」）無類の幸運児としても造型されている。さらに「おほかた、さいはひおはしまさん人の、和歌のみちをくれたまへらんは、ことのはへなくやはべらまし。」（「道長伝」二一六頁）という理念に基づいて「居易・人丸・躬恒・貫之といふとも、えおもひよらざりけん」（同二一四頁）と文芸的能力も過度に賛嘆され、容姿・外見までもが絶賛されるのである（同二一五・二二一～二二二頁）。これらに対応してか、道長への賛辞も「一乗の法のごとし」（前掲Ⅴ）、「権者にこそおはします」（「道長伝」二〇七頁、「藤氏物語」二四〇頁）、「転輪聖王などはかくや」（「道長伝」二一五頁）、「たゞ毗沙門のいき本みたてまつらんやうにおはします。」（同二二一頁）、「世間のひかりにておはします」（同二二二頁）、「聖徳太子のむまれ給へる」（「藤氏物語」二四〇頁）、「弘法大師の、仏法興隆のためにむまれたまへる」（同）、「（道長の執政期は）かくたのしき彌勒のよ」（同二四一頁）などと極端である。

これらの属性はすべて道長が全円的な「さいはひ人」であったと見なされることに帰着するのかもしれない。[8]しかし、「さいはひ」には「宿世」的側面もあり、[9]栄華の実状よりも栄華の原因を規定するとも思われる。長徳元年に上席の公卿のほとんどが急逝して「御としいとわかくゆくすゑまちつけさせ給べき御よはひ」（「道長伝」二〇四頁）と言われる段階で道長に政権獲得の好機がめぐってきたことについて世次は「それもたゞ、この入道殿（道長）の御さいはひの、上をきはめたまふにこそ侍めれ。」（同）・「いとかゝる運にをされて、御兄たち（道隆・道兼）はとりもあへずほろび給にしにこそおはすめれ。」（「間語」二二六頁）と評し、道長の子女十二人がすべて例外なくすぐれているのを「入道殿（道長）の御さいはひのいふかぎりなくおはしますなめり。」（「道長伝」二一三頁）と断定し、敦明親王の東宮辞退の原因の一つにも「殿下（道長）の御報のはやくおはしますにをされたまへる」（「師尹伝」一〇二頁）と道長の強運を想定するのである。これらには道長の成功を支える条件としての「さいはひ」という意味が大きく、その結果実現した繁栄そのものを説明するまでには至らない。豪胆と言われる性格も、並外れる意力も、姉の後援も、天地神明の助力も、栄華の条件ではあっても栄華が享受される実態を伝えることはできない。ただし、「さいはひおはしまさん人」に歌才を要求する姿勢からは、「さいはひ」を栄華そのものと直結させる観点がたしかに認められる。が、それにしても、ここから栄華の実情はほとんど理解できないであろう。文化的資質は、確固とした栄華を装飾する（花を添える）程度のものに過ぎない。栄華の実相は別のところにある。権勢をめぐる抗争が繰り返される『大鏡』世界にあって真に道長に占有される美質は他者に対する温情であり、寛厚にして余裕ある心であると見なされるが、[10]これも権勢を掌握し、政争の世界の頂点に到達してはじめて効力を発揮する性格のもので、それだけで頂点の様相を表すことはできない。それでは、道長の空前絶後と言われる「栄花」はどのよ

うな実質をもつのであろうか。

ところで、当然ながら、『大鏡』の道長は歴史上の道長とは一致しない。『大鏡』作品から抽象できるのは、ある特定の方向から照らし出された一面的な人間像、あるいは誇張・歪曲・改変を施された虚像の一つに過ぎないのである。史上に実在した藤原道長が意欲や英知の面が突出した理想的人間としてでなければ捉えられないことはあり得ない。また、道長の栄華の因由が究明される際に、天皇との血縁関係だけが極度に注目されて、それ以外の要因はほとんどすべて捨象されてしまう。[11] たしかに、これは摂関政治の本質を射抜く卓越した史眼の存在を裏付け、『大鏡』の価値の一つに数えられるものであるが、これだけで摂関政治の本質や道長栄華の基盤のすべてを解明したとは言えそうにない。王朝貴族が絶大な権勢を確保するには、最も神聖な血縁につらなる貴種性や世襲財産と荘園の寄進による経済力も不可欠であると考えられている。[12] この視点は『大鏡』には欠けていると言わざるを得ないであろう。ただし、これは看過されたというより認識の範囲を越えていたと見なされるべきかもしれない。しかし、為政者道長の国政に関する記事がまったく見いだせず、羨望を集めたはずの私生活もほとんど描出されないのは、『大鏡』の著作目的がそこになかったために捨象された結果としか考えられないであろう。[13] また、摂政・関白の権力や影響力は根本的には人事権の掌握に基づくとも思われるが、[14] それを窺わせる叙述はほとんど見られない。[15] 『大鏡』は道長の幸福栄華を賛美するが、功業等には触れようとしないとも言われる。[16] このように、道長の肯定的側面や栄華への道程に関する事項でも『大鏡』の対象とならない場合があるし、栄華の実状についても徹底した取捨選択が行われていることも明らかである。

また、諸史料に残存する道長は『大鏡』に説かれるような理想的な人間ではなかったらしいことがさまざまに立証されている。[17] 政権争奪の暗闘を勝ち抜くために権謀術数の限りを尽くす姿や、敵対者に対する陰険で酷烈な攻撃の数々が無視されるだけではない。彼の人間的弱さもすべて隠蔽される。『大鏡』において道長が栄華を満喫していたはずの時代は、反面、不安と苦痛の時代でもあったし、政敵伊周を圧倒しきるほどの強固な精神をもつ道長でもなかった。[18] 度重なる疾病に懊悩し、栄光の地位を自ら放棄しようとさえしていた彼の表情や、権力獲得の経緯の中で打破し、殲滅したはずの敗者の怨念に恐懼し、物怪に呻吟したらしい彼の肉声を、『大鏡』から読み取るのは不可能なのである。

作者は歴史上の道長を全円的に再現しようとは思わなかった。あるいは到底できなかった。それは、『大鏡』に、栄華の実相よりも由来が、結果よりも経過が重視される傾向があるとしても、それだけでは説明しきれないであろう。『大鏡』の道長は栄華に関係のない側面のすべてが除去された、極度に虚構化された道長である。[19] しかも、その栄華も全面が捉えられるわけではない。『大鏡』における道長の理想性、栄華の実質を究明するには、このように、かなり恣意的な叙述方法が潜在していることを前提としなければならないであろう。

三

道長の理想的性格は、宿運の強さとともに、道隆・道兼・伊周らの競争相手との直接対決によって顕現されている。これは、道長が歴史的に最もすぐれた人物であることを証明しようとする大宅世次あるいは「大臣列伝」の主要目的の一つ（Ⅳ・Ⅴ）をみごとに達成するものである。

「大臣列伝」の逸話群は、同族ながら家門を異にする摂政・関白、大臣・公卿よりも道長が優り（Ⅳ）、古今のあらゆる最高権力者と比べても道長が最も繁栄する（Ⅴ）という主張に対応する。無数の稚魚の中から生き残った唯一の成魚、「菴羅」の木の唯一の結実に例えられる（Ⅴ）ほどの選ばれた存在が道長であるという認識に基づいて「列伝」は形成されている。

このような卓越性の証明は、道長と他者とを対比しなければ成り立たない。そこにあるのは道長の理想的属性を相対的に実証する態度に外ならない。絶対的価値が存在するというのではなく、相対的に優越するというに過ぎないのである。つまり、どのような人物と比較しても道長の理想性が損なわれない尺度が用意されていることを意味するのではないだろうか。意欲・世才・余裕・文化的資質・容姿などがそれに相当すると思われる。そうすると、道長が達成した栄華そのもののすばらしさを証する尺度の存在も予想される。もしなければ、『大鏡』は道長の幸福を盲目的に賛美するものと言わざるを得ないであろう。

この尺度に関してまず注目されるのは、『大鏡』において道長の栄華を象徴すると見なされる法成寺（無量寿院）の壮観である。[20]「藤氏物語」に、道長の無量寿院がこの国のいかなる寺院よりも「すぐれる」ことが執拗に述べられる。鎌足の多武峯（妙楽寺）・不比等の山階寺（興福寺）・基経の極楽寺・忠平の法性寺・師輔の楞厳院（法華三昧堂）・為光の法住寺という藤原氏の有力者たちの造営をはるかに凌ぎ、加えて、聖武天皇の東大寺・兜率天の一院を移造したという大安寺・聖徳太子の天王寺（四天王寺）・奈良の七大寺や十五大寺などよりもさらに「まさる」道長の無量寿院は、「極楽浄土のこのよにあらはれける」とまで称揚されるのである（二三七・二三八頁）。しかしこれを文面どおりに納得するのは難しい。まず、比較の根拠となる基準が示されていないので、何がどのように最高なのかがまったく感得できない。あるいは、各寺院を実見することやそれぞれの内実を知悉することが最低限の常識として要求されるのかもしれないが、それでは言語を表象とする文芸・歴史書の許容範囲を逸脱しかねない。実際の法成寺がすべての寺院をすべての点で凌駕できるとも思われない。「すぐれる」点の証明が必要であろう。いずれにしても、現存する『大鏡』作品内から無量寿院の絶大なることは理解できそうにない。建立した寺院では、道長の栄華の優位性を客観的には提示できないのである。

次に権力者の盛容を測る尺度として考えられるのは、最終的に到達した政治的社会的地位である。道長は人臣に可能性がひらかれる最高の地位を得たことで尊崇されたのは言うまでもない。しかし、摂政・関白・太政大臣などの制度上の極官は、全時代を通じて道長が独占できる性質のものではない。まったく同じ地位と権限を取得した人物は数多く存在するのであって、公卿の筆頭にいるだけでは唯一無二とは言えないであろう。

ところが、最高の地位を維持した年数によると、比較は可能になる。独立した「伝」が与えられる二十人の大臣は、「大臣列伝」において、高位顕官に就いたというだけではなく、その地位を保持した年数が必ず記載されている。摂関や大臣などの在任年数をもって有力者の「ありさま」が説明されると見なせよう。[21]これこそが栄華の程度の対比を可能にする尺度となり得る。表1に見られるように、二十人の有力者に関しては公卿・大臣・摂関職の年数の少くとも一つが記されるのである。道長の場

表1　「大鏡」に表示される公卿・大臣・摂政・関白の在任年数

	公卿（年数）	大臣（年数）	摂関（年数）
冬嗣	16	6	
良房	30	25	15
良相		11	
長良	13		
基経	27	20	十余年
時平		11	
仲平		13	
忠平	42	32	20
実頼		27	20
頼忠		19	9
師尹		3	
師輔	26	14	
伊尹		3	―
兼通			6
為光		7	
公季		―	
兼家	20	12	5
道隆			6
道兼		5	7日
道長			**31**
顕忠		6	
実資		―	
顕光		―	
伊周		―	―
鎌足		25	
不比等		13	
房前	20		
真楯	7		
内麿	20	7	

合は「よをたもたせ給ふこと、かくて三十一年ばかりにやならせ給ぬらん。」（「道長伝」二一四頁）とあって、関白（実は内覧）宣下以後の年数だけで空前の長期政権が保たれる事実が明記されている。「道長伝」が一応閉幕して「藤氏物語」が導かれる際に、

VI いまのよとなりては、一の人の、貞信公（忠平）・小野宮殿（実頼）をはなちたてまつりて、十年とおはすることの、ちかくは侍らねば、この入道殿（道長）もいかゞとおもひ申侍しに、いとかゝる運にをされて、御兄たちはとりもあへずほろび給にしにこそおはすめれ。（二二六頁）

と語られるのに照応して、道長の執政三十一年は忠平・実頼の二十年、さらには、良房（十五年）や基経（十余年）をも超える最高・最長のものだったということになる。そのうえ、この数値は「大臣列伝」や「藤氏物語」に見られる（「伝」を設置されない九人を含む）大臣・公卿の在位年数すべてを上回る。しかも、万寿二年に立って歴史を眺める『大鏡』では道長の時代は永遠に継続するかのようである。二年後に道長が死去するとは到底予想できない。「今」（万寿二年）に持続するからこそ価値が存するのである。[22]

栄華の年数表示は、道長栄達の相対的優位を顕示し、保障する尺度と見なせる。しかし、道長が「よをたもたせ給」という「三十一年ばかり」には、摂政の職を嫡男頼通に譲った後、または出家した「寛仁三（一〇一九）年己未三月廿一日」以降の六～八年間が含まれてしまい（「道長伝」二一四頁）、公平な数値とは言い難い。少なくとも、良房の「摂政・関白などしたまひて十五年」（六六頁）、頼忠の「関白して九年」（九一頁）、兼通の「関白したまふ事、六年」（一五三頁）、兼家の「摂政にて五年」（一六七頁）、道隆の「関白になりさかへさせたまて六年ばかりや」（一七五頁）、道兼の「関白と申て七日ぞ」（一九六頁）と同等に扱うことはできない。基経が「よをしらせ給事十余年かとぞおぼえ侍。」（六八頁）と言われ、忠平が「よをしらせ給事廿年。」と評価されるのが実際の摂関職在任年数を表わし、実頼の「天下執行、摂政・関白し給て廿年ばかりやおはしましけん。」（八五頁）の二十年に首席大臣として「天下執行」した期間が含まれるのに対して、道長の三十一年間は意味が違う。道長の場合は引退後、出家後も執政の期間に加算されてしまうのである。たとえ引き続き実権を掌握していたとしても、この数値が道長の栄華の程度を誇張する役割を果たすことは

否定できないであろう。[23]

道長が公卿と大臣に在官した年数は、「道長伝」にある各官職就任時の年齢表記から簡単に算出できる。それにもかかわらず、その数値はどこにも記載されていないのである。他の大臣と比べて群を抜いて詳しく経歴が紹介される道長であるのに、この点だけが省筆されるのは異例と判断しなければならない。公卿・大臣・摂関すべての年数が表示される良房・基経・忠平・兼家との隔たりは大きい。そこで、道長の場合を計算してみると、公卿は三十二年間[24]になって忠平の四十二年に及ばず、良房の三十年と拮抗する。また、大臣は二十五年間[25]で忠平（三十二年）・実頼（二十七年）・良房（二十五年）を凌駕できなくなってしまう。万寿二年まで在任期間が継続すると仮定しても道長が最高とはならないのである。道長の幸福は万寿二年以後も永続することが暗示されるが、入道してしまったからには顕官在任年数を加えることはできない。栄光の地位を保持する期間を対比して道長が至上無比である点を証明するためには、この三十一という数値のみが有効となる。その他の年数表示は省略されなければならない。さらに言えば、令制上の最高官である太政大臣位が対比されないのも同様の理由による。『公卿補任』[26]によると、道長の太政大臣位は寛仁元（一〇一七）年十二月四日から翌寛仁二年二月九日までの二ケ月間にしかすぎないもので、忠平の十四年間、基経の十二年間はもとより実頼・伊尹・兼通・頼忠・兼家・為光・公季と続く過去のすべての太政大臣経験者に劣ってしまうからである。道長の任太政大臣に触れる「御とし五十一にて、摂政せさせ給とし、わが御身は太政大臣にならせ給て、御とし五十四にならせ給に、（中略）御出家し給へれど」（二一三・二一四頁）という口吻からは、不明確な表現ではあるが、五十一歳から五十四歳までの四年間太政大臣位にあったようにも受け取られる。[27]史実の歪曲とも見なされかねないが、それにしても道長は最高にはなり得ないのである。

このように、『大鏡』に一貫して明示される高位高官の維持年数は道長の理想性を客観的に際立たせるために機能すると判断できる。その目的に添って誇張・省略などの手法が用いられていることも指摘できる。事実のすべてを提示するのではなくて、道長一人を特立させるに有効な一面だけを強調する著作態度が瞥見できるであろう。

四

古今の権力者の栄華を道長のそれと対比させる尺度として、もう一つ、子孫の繁栄の程度を想定しなければならない。原義においても、当時の通念においても、「栄花」の実質には本人の栄達だけでなく、子孫隆盛という要素も含まれるのであるが、その傾向は『大鏡』中に最も典型的に表れる。[28]「列伝」は、二十人の大臣を子孫の「ありさま」をもって比較する意図に応じて構成される一面をもつ。[29]「このおとゞ（為光）の御ありさま、かくなり。」（「為光伝」一六一頁）、「この太政大臣殿（公季）の御ありさま、かくなり。みかど・きさき、たゝせたまはず。」（「公季伝」一六二頁）などという場合の「ありさま」は明らかに子孫の有様をより多く含んでいる。「かくなり」に対応するのはほとんどすべてが子孫に関する記事なのである。また、「頼忠伝」が「このおとゞ（頼忠）のする、かくなり。」（九五頁）と終結され、「兼通伝」の末尾近くに「このおとゞ（兼通）の御する、かばかりか。」（一五八頁）と記され、「為光伝」が「このおとゞ（為光）いとやむごとなくおはしましゝかど、御する、ほそくぞ。」

（一六一頁）と総括されるなど、「大臣列伝」[30]は子孫の動向に主要な関心が払われて形成されていると見なし得る。そこには、子孫の優劣を尺度に栄華が対比される傾向が顕著に見いだせる。

子孫の対比によって、まず、「正系」[31]（道長の直系の父祖）の七人が相対的に峻別され、その七人の中からさらに道長が峻別されるところに「列伝」の機軸がある。[32]その峻別の要因として各人物の死亡事実の記載の有無が注目される。かつて指摘したことがあるが、[33]正系の七人に比べて傍系十三人の「伝」には死没が特記される場合が極端に多いのである。そして、この点では、正系の中でも道長が抜きんでるのが明らかになる。そもそも、『大鏡』に仮構された「現在」万寿二年五月というのは、道長女寛子・嬉子の相次ぐ死去の直前、道長の二子（妍子・頼信）と道長自身が死滅する二年前として選定された可能性が高いのである。[34]「道長伝」に定位置を与えられる人物が、他の十九「伝」の人物より平均年齢（生誕から万寿二年までの時間）が低く、かつ全員が「今」の時点で健在であることによって、すでに道長の栄華は圧倒的になるであろう。世次翁の以下の提言はそれを端的に示している。

Ⅶこの殿（道長）の君達、おとこ・女あはせたてまつりて、十二人、かずのまゝに〇おはします。おとこも女も、御つかさ・くらゐこそこゝろにまかせ給〇らめ、御こゝろばへ・人がらどもさへ、いさゝかかたほにてもどかれさせ給べきもおはしまさず、とりぐに有識にめでたくおはしまさふも、たゞことぐならず、入道殿の御さいはひのいふかぎりなくおはしますなめり。さきぐの殿ばらのきんだちおはせしかども、みなかくしもおもふさまにやはおはせし。をのづから、おとこも女も、よきあしきまじりてこそおはしまさふめりしか。

（「道長伝」二一三頁）

Ⅷ太政大臣道長おとゞは、太皇大后宮彰子・皇大后宮妍子・中宮威子・東宮の御息所（嬉子）の御父、当代（後一条帝）幷春宮（敦良親王＝後朱雀帝）の御祖父におはします。こゝらの御なかに、后三人ならべすへてみたてまつらせ給ことは、入道殿〇下よりほかにきこえさせ給はざんめり。関白左大臣（頼通）・内大臣（教通）・大納言二人（頼宗・能信）・中納言（長家）の御おやにておはします。さりや、きこしめしあつめよ。日本国には唯一無二におはします。

（「藤氏物語」二三七頁）

道長の栄光の人生はこのように総括される。Ⅶの直前には三男頼信の出家にまつわる悲傷が縷述されるのに、子孫の完璧な繁栄が賛美されるのは「強引」[35]と評されるのがふさわしいかもしれない。Ⅷには右馬頭にとどまった頼信の登場する余地はないのである。しかし、十二人が「かずのまゝに」生存しているという観点によれば、彼もまた道長栄華に不可欠な要件になり得るであろう。

さて、『大鏡』[36]における道長栄華の象徴としては「三后」が注目されることが多い。道長の三人の娘が同時に三代の帝の后に並び、しかも后位を独占することが驚嘆され、称賛されるのである。たしかに、『大鏡』の対象とされる時代に三子を立后させたのは道長以外にない（表2参照）。このような「三后」ではあるが、実際上栄華そのものと見なせるのであろうか。『大鏡』中に后位が話題の中心になる場面はそれほど多くない。[37]作品内で一様に希求され、争奪の対象になり得るのは摂政・関白または太政大臣の地位であって、[38]后位ではない。男性貴族に到達可能な最高の立場（たとえば摂関職）が、『大鏡』では栄華に等しい。[39]后位自体は最終

目標にはならないのである。

『大鏡』には権力の源泉として天皇の外戚となることを最重要視する姿勢が顕著であるが、[40]その姿勢からは「后」の中でも天皇の「母后」が強調されるようになる。[41]『大鏡』の后位は「母后」として冬嗣流藤原氏の正系と皇統とを連結させる紐帯になってはじめて意味をもつからである。この観点に基づくと、「三后」の内で母后は彰子一人だけであって「兼家伝」の二人（詮子・超子）に及ばないという見方も成り立つ。また、母后が重視されるのは、后位が『大鏡』世界の目標ではなく、むしろ繁栄するための条件（紐帯）と見なされるからであろう。[42]そうすると、「三后」の意義も「今」生存している点にもとめられるのではないだろうか。生存していればこそ后位の独占が可能になったのであり、その独占はもう一人の「后」娍子皇后の死によってもたらされたものであった。[43]したがって、「道長伝」四人目の「后」嬉子は死後に母后になったため、「三后」とは同一視されないのである。懐子（伊尹女、花山帝母后）・超子（兼家女・三条帝母后）の例にみられるように、一般に『大鏡』の贈后（没後后位を追贈された母后）は軽視されている。道長の子裔の繁栄を言うなら、嬉子はもちろん、その所生の後冷泉帝や後朱雀帝（彰子所生）の即位や教通の関白就任などにもっと言及するべきかもしれない。三代五十二年間の外祖父であった点も道長の繁栄を十分に証明するであろう。それらが記されないのは、すべて、万寿二年を「今」に設定して「道長伝」から死滅を排除したためと思われる。全員が生きていることで相対的優位性が保たれたのである。

表 2　「大臣列伝」に記載される、子孫としての帝・后

大臣	外　　孫	后
冬嗣	文徳	**順子**
良房	清和	**明子**
良相		
長良	陽成	
基経	朱雀・村上	**穏子**
時平		
仲平		
忠平		
実頼		
頼忠		遵子
師尹		娍子孫
師輔	（冷泉・円融）	**安子**
伊尹	（花山）	**懐子**贈后
兼通		媓子
為光		
公季		
兼家	一条・三条	**詮子・超子**贈后
道隆		定子
道兼		
道長	当　代・東　宮 （後一条）（後朱雀）	**彰子**・妍子・威子

注　「大臣列伝」に登場する后にかぎる。
　　太字は母后をあらわす。

『大鏡』の「三后」は、他の九人の男女と一体化して道長の完全な栄華（子息が完全なこと）を形成することになる。さらに将来も栄えつづける、生存しつづけるという予見が伴えば、その顕栄は一層輝きを増すであろう。『大鏡』の現在、万寿二年五月に立って虚心に未来を展望する者に、三年以内に道長本人と四人の子女がこの世を去ると予想できるはずがない。それどころか、後冷泉帝（親仁親王）の誕生（二〇六頁）や道長外孫禎子内親王が母后・女院になること（二四九頁）が予祝され、道長の嫡孫通房（長君）の誕生が祝福されて（二三二・二三三頁）、繁栄の永続が約束される。[44]寛子・嬉子の死が暗示され、藤原氏にかわるような源氏の興起が予想される記述はあっても（「昔物語」二七五・二七六頁など）、[45]『大鏡』全編の基調を揺るがすには至らないであろう。むしろ、源氏の繁栄も道長の栄華に吸収されてしまうという考え方が適切かもしれない。『大鏡』からは、道長の源・藤両氏を融合させようとする意思が

表3　「大臣列伝」にみられる子孫の官位（中納言以上）

列伝	大臣	大納言	中納言
冬嗣	長良[贈太] 良房[太] 良相[右] 〈良世・恒佐・高藤・定方〉	〈定国〉	〈兼輔・為輔・朝忠・朝成・邦基〉
良房			
良相		常行	
長良	基経	〈国経〉	
基経	時平[左] 仲平[左] 忠平[太]		
時平	顕忠[右]	保忠[大将]	敦忠
仲平			
忠平	実頼[左] 師輔[右] 師尹[左]	師氏	
実頼	〈頼忠〉 実資[右] [注1]		懐平[注4]
頼忠		公任	
師尹		済時[大将]	
師輔	伊尹[太] 兼通[太] 兼家[太] 為光[太] 公季[太] [注2]		
伊尹		行成	義懐
兼通	顕光[右]	朝光[大将]	朝経[注4]　時光
為光		斉信[注3]	公信[注5]
公季			実成[注5]
兼家	道隆[内] 道兼　道長	道綱	
道隆	伊周[内]	道頼	隆家
道兼			兼隆[注5]
道長	頼通[左] 教通[内]	頼宗・能信	長家

※　〈　〉は各「列伝」に取り上げられないことを、＿＿は万寿二年現在の在位をあらわす。太・左・右・内はそれぞれ太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣をあらわす。

注1…実頼養子。実は孫。

注2…為光・公季は「師輔伝」には「五人の太政大臣」と一括されて記されるだけである。

注3…「為光伝」には任中納言の事実しか確認できないが、「昔物語」では大納言であった事がわかる（268ページ）。

注4…孫。

注5…公信・実成・兼隆はそれぞれ左衛門督（左兵衛督の誤り）・右衛門督・左衛門督と紹介されているが、万寿二年には中納言か権中納言だった。

看取されるのである。[46] 道長の源師房婿取りを「あさはかに、こゝろえぬこと」としか評価できない周囲に対して、「入道殿（道長）おもひをきてさせ給やうありけむそかしな。」（「道長伝」二〇九頁）という道長の将来への深慮が語られている。「世継」「鏡」に規定される歴史物語が、基本的に栄華を賛美し、寿祝する性格をもつという林屋辰三郎氏の指摘[47]はこの点でも示唆に富む。

また、『大鏡』における信仰には、子孫が先祖の霊を鎮魂するとそれに応じて先祖が子孫の興隆を助成するなどの、発展を約束する機能がある。[48] そうすると、法成寺の壮観は、道長の子孫の壮大な繁栄をもたらすものなのかもしれない。

以上のように、子女の大部分が高位に上り、全員が健在である点に、道長の未曾有の栄華の根拠がある。その点を典型化させるために、子女は「きたの方ふたところ」（「道長伝」二〇五頁）・「きたのまんどころの二人」（同二一三頁）と称される倫子・明子のもうけた十二人に限られて、他の庶子はすべて省略されるとも考えられる。『尊卑分脈』に載る僧正長信（母は源重光女）・三条院女御盛子らは『大鏡』には無視される。[49]『小右記』『御堂関白記』に見いだせる二子も記されない。[50]その一因に道長の栄華を鮮明にするための意識的省略が想定できるかもしれない。また、公任女が教通（道長男）北の方として「としごろおほくの君たちうみつゞけ」たことが「頼忠伝」に明記される（九三頁）が、それは「道長伝」にはなく、道長の内孫としては紹介されない。『大鏡』で道長の栄華を支えるのは、優秀な十二人の子女と後世に繁栄を持続させる嗣孫一人に単純化されるのである。この単純化は、「くだ〳〵しきをんなごたちなどのことは、くはしくしりはべらず。」（「冬嗣伝」六五頁）・「この大臣（良相）の御女子の御事よくしらず。」（「良相伝」六七頁）などの省略とは明らかに異なり、きわめて意図的なものが看取される。

ところで、男子の栄進の程度では「道長伝」は他の「伝」すべての凌駕はできない（表3参照）。「兼家伝」には三人の関白（道隆・道兼・道長）があり、師輔は五人の太政大臣（伊尹・兼通・兼家・為光・公季）・三人の摂政（伊尹・兼通・兼家）の実父として紹介されていて、ともに道長より男子が栄達していると見なせる。しかし、「大臣列伝」における兼家の子女は道長を除く全員が万寿二年には早くも死去しており、道長の子女と鮮明に対照する。孫の世代でも兼隆しか生き残っていないのである。また、兼家は娘に不義の尚侍綏子をもち、「よのしれものにて、まじらひもせでやみたまひぬとぞ」（一七五頁）と紹介される道義を四男にもつ。道長との較差はさらに歴然とする。世次の揚言Ⅶはこういうことを意味するのであろう。

次に、「師輔伝」を検討する。まず師輔自身がせっかくの吉夢を一女房に誤解されて、それが原因で「かく子孫はさかへさせ給へど、摂政・関白えしおはしまさずなりにしなり。又、御すゑにおもはずなることのうちまじり、帥殿（伊周）の御ことなども、かれ（夢）がたがひたるゆへに侍めり。」と評される（一一九・一三〇頁）。「師輔伝」の範囲外の人物伊周の失墜までが取り上げられて、子孫の不完全なることが強調されるのである。五人の太政大臣に関しても、「男君達は、十一人のなかに、五人は太政大臣にならせたまへり。」（一一六頁）、「男君達五人は太政大臣、三人は摂政し給へり。」（一三二頁）とは記されるが、五人の実名はどこにもない。他の「伝」と比べても例外的である。為光と公季にいたっては、「師輔伝」からその存在を察知することさえできない。「伝」を別置される人物は必ずその父親の「伝」に実名と官職が明記されるという「大臣列伝」の原則に照らすと、この二人の待遇はきわめて異例であろう。[51]師輔の子息の栄達が故意に朧化されて、道長の栄華が相対的に際立つという作為が認められるかもしれない。なお、「兼家伝」の三人の関白、「師輔伝」の三人の摂政は「道長伝」を上回るが、そのことが注目されることはない。

ここに見たように、道長の子裔の栄達はかなり意図的に誇張され、『大鏡』（特に「大臣列伝」）の中で相対的にすぐれるのである。その際の尺度は、現在さらに未来に生存するという一点に集約される。子孫の官位昇進の程度によると、道長は「よにすぐれる」ことはできないであろう。[52]

また、道長本人も生存するからこそ前節の三十一年間という圧倒的栄耀を確立できたとも言える。[53]

五

道長とその栄華の理想性は、『大鏡』では、過去・現在・未来にわたって徹底的に証明されている。ここまでにはそのうち「現在」だけに限定して考察してきたことになるが、この「現在」は万寿二年という仮設された現在だった。道長の栄華の頂点を見定め、その延長線上の未来をも美化するために選ばれた、理想的な瞬間が万寿二年五月某日だったのである。したがって、『大鏡』の「現在」は、道長栄華の最終到達点すなわち理想的な「結果」とも見なせる。世次が「ながれをくみてみなもとをたづねてこそはよく侍べき」（「大臣列伝序」六三頁）という警句を発して、結果と原因の双方を探求すべきことを教えるように、[54]『大鏡』では結果も明瞭に認識されるはずである。

本稿では、『大鏡』における結果としての道長栄華を究明するために、原因に関わると思われる要素を極力除去しようと試みた。それによって、超絶した栄華の本質を客観的に実証する尺度二つ――自身の栄達を維持する期間の長さと、子孫が繁栄して残らず壮健であること――が『大鏡』に潜在することが指摘できた。主として数量による対比を経て、道長の栄華ははじめて全時代的に特立すると言える。ところが、その対比に際して幾多の作為がなされていた。誇張・歪曲・省略などがそれである。この二つの尺度では栄華の客観的な証明は不可能なのであった。ただし、不図も、『大鏡』の虚構の方法のいくつかとその効果が抽出されたことになる。

作品内の栄華の実質を量的な比較だけで追究するのは不適切かもしれない。質の面での解明もなされなければならない。[55]たとえば、道長は物語の主人公に準じて造型されると言われる。道長の理想性を「総合的な卓越性」で捉える視点もある。[56]これらによってこそ、道長に体現された栄華は質的に解明されるのかもしれない。また、本稿は大宅世次という一人の仮構された人物の発言だけに依拠して、対話体による『大鏡』全編を把捉しようとしたことになった。これは問題であるが、『大鏡』に道長の栄華とその由来を追求する意図があるとすると、それは世次の役割なのである。また、結局は、世次のⅠ～Ⅷの宣言を追認するに終始してしまったとも言える。しかし、一方、世次の目的表明が虚飾ではなくて、『大鏡』の内実と照応していることが明らかになった。少なくとも、『大鏡』に、道長の栄華の由来だけでなく、栄華の実質を究明しようとする一貫性があり、そのために一貫して虚構や潤色の手法が用いられているのは間違いない。そうして、そのすべてが、万寿二年を現在とする最大の虚構が道長とその子裔全員を永久に生存させるという一点に結びつくのである。万寿二年に立って、道長の栄華は最も理想的なのであり、その時点では「道長伝」だけが死滅を免れる。このかぎりでは『大鏡』は十分客観的と言えるであろう。また、このような視点も『大鏡』の本質に迫る道途の一つではないだろうか。

註

（1）　阪口玄章氏「大鏡に於ける『道長中心』とは何を意味するか」（『古典研究』昭和12年11月）、伴利昭氏「大鏡における道長中心主義について」（『文車』第十三号、昭和40年3月）などに詳しい言及がある。

(2) 『大鏡』の引用は、松村博司氏校注『大鏡』（日本古典文学大系21、岩波書店、昭和35年刊）による。ただし、（ ）内の補足説明は適宜論者が加えた。以下同じ。

(3) 松本治久氏著『大鏡の構成』（桜楓社、昭和44年刊）、同氏著『大鏡の主題と構想』（笠間書院、昭和54年刊）など参照。

(4) 阪口玄章氏前掲論文（1）、竹鼻積氏「大鏡の方法――その説話を中心として――」（『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』有精堂、昭和47年刊）など参照。

(5) 拙稿「『大鏡』の編年史的側面――『栄花物語』の克服と追認――」（『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編）』第二十二巻第二号、昭和63年12月）参照。

(6) 山岸徳平氏「大鏡略説」（『国文学解釈と鑑賞』第六号、昭和11年11月）、小松茂人氏「『大鏡』の人間」（『文学』第十一巻第五号、昭和18年5月）、同氏「大鏡の人間像」（『国文学』第二巻第十二号、昭和32年12月）、松村博司氏「解説」（『大鏡』日本古典文学大系21、岩波書店、昭和35年刊）、松本治久氏「大鏡『大臣の物語』に登場する人々――大鏡の主題と構想――その三」（『平安朝文学研究』第三巻第五号、昭和48年8月。後に同氏著『大鏡の主題と構想』〈前掲（3）〉に収録）など参照。

(7) 小松茂人氏前掲二論文（6）参照。

(8) 保坂弘司氏「『大鏡』における道長像の形成」（『学苑』第四五六・四五八号、昭和52年12月・53年2月。後に同氏著『大鏡研究序説』〈講談社、昭和54年刊〉に再録）。

(9) 原田芳起氏「文学的発想における〝さいはひ〟――中古物語文学に関する試論――」（『樟蔭国文学』第十五号、昭和52年10月）参照。

(10) 藤村作氏「大鏡に関する考察」（『国語と国文学』第一巻第一・二号、大正13年5・6月）、小松茂人氏前掲二論文（6）など参照。

(11) 拙稿「『大鏡』の構想と皇位継承過程――「正統」の確定と顕在化――」（『島大国文』第十七号、昭和63年11月）参照。

(12) 原田隆吉氏「『大鏡』『栄華物語』その他」（古川哲史氏他編『古代の思想』日本思想史講座第一巻、雄山閣、昭和52年刊）。

(13) このことは、道長以外の有力者の場合もほとんど同様であることからも推定できる。

(14) 大臣・納言・国司などの地位が摂政・関白などの最高権力者の個人的な意思に左右されるのは、説話文学などの好素材になるであろう。

(15) わずかに、誠信・斉信兄弟の中納言任官をめぐる軋轢に道長の影響力が関与することが認められる程度である（「師尹伝」）。

(16) 藤村作氏前掲論文（10）。

(17) 松村博司氏著『歴史物語』（塙書房、初版昭和36年・改訂版昭和54年刊）初版一二三・一二四頁、改訂版一二七・一二八頁、清水好子氏「藤原道長」（『中古文学』第一号、昭和42年3月）、保坂弘司氏前掲論文（8）など。

(18) 清水好子氏前掲論文（17）、赤木志津子氏著『御堂関白藤原道長』（秀英出版、昭和44年刊）、北山茂夫氏著『藤原道長』（岩波新書、昭和45年刊）、山中裕氏著『藤原道長』（教育社歴史新書、昭和63年刊）など参照。

(19) 伊藤康安氏「大鏡覚書」（『国文学研究』第二集、昭和25年5月）、塚原鉄雄氏「大鏡形象の虚構設定」（同氏著『王朝の文学と方法』風間書房、昭和46年刊）など参照。

(20) 増淵勝一氏「大鏡の歴史性――道長の栄花の由来とその実体――」（『立正女子大学短期大学部研究紀要』第十四号、昭和45年12月）、松本治久氏「大鏡は道長の栄華を如何に語ろうとしたか――大鏡の主題と構想　その四――」（『武蔵野女子大学紀要』第九号、昭和49年3月。同氏著『大鏡の主題と構想』〈前掲

（3）〈に収録）、森なおみ氏「大鏡の主題についての考察」（『香川大学国文研究』第八号、昭和58年9月）など参照。

（21）増淵勝一氏前掲論文（20）参照。

（22）佐藤正英氏「日本における歴史観の一特質――「正統」をめぐって――」（『理想』第四三一号、昭和44年4月）、相良亨氏「持続の価値」（同氏著『日本人の心』東京大学出版会、昭和59年刊）、拙稿「『大鏡』「大臣列伝」の考察――冬嗣流藤原氏「正系」決定過程をめぐって――」（秋田短期大学『論叢』第三十五号、昭和60年3月）など参照。

（23）出家後准三宮の位と年官・年爵が与えられたこと（二一四頁）によって、「よをたもたせ給こと」（同）が継続していると見なされているのかもしれないが、これらの待遇はたとえば道長室倫子も受けており（二〇七頁）、摂政・関白などと等質化はできない。

（24）「この殿（道長）、宰相になりたまはで、直権中納言にならせ給、御年廿三。」（二〇三頁）とあるのによって、「御とし五十四にならせ給に」「御出家し給」（二一四頁）までの三十二年と考えた。ただし、『公卿補任』（新訂増補国史大系）によると、永延元（九八七）年に二十二歳で従三位に叙せられ、公卿に列している。また、長和五（一〇一六）年、五十一歳で左大臣を辞した後、寛仁元（一〇一七）年十二月から翌年二月まで、五十二・五十三歳の時に太政大臣に任ぜられていた。したがって、公卿（参議・三位以上大臣まで）としては三十年または三十二年ということになる。

（25）「このいまの入道殿（道長）、そのおり大納言中宮大夫とまうして、御とし一とわかくゆくすゑまちつけさせ給べき御よはひのほどに、卅にて、五月十一日に、関白の宣旨うけ給はりたまうて」（二〇四頁）とある関白（実は内覧）宣下の時点で大臣にも任じられたと考えて、五十四歳の出家まで二十五年と見なした。これより長いことはあり得ない。ただし、『公卿補任』の長徳元（九九五）年六月十九日任右大臣（三十歳）から左大臣を辞す五十一歳か太政大臣を辞す五十三歳までをみると、二十二年もしくは二十四年となる。

（26）黒板勝美他編『公卿補任　第一篇』（新訂増補国史大系、吉川弘文館、昭和51年版）による。

（27）拙稿（22）参照。

（28）芳賀矢一氏「歴史物語」（『芳賀矢一遺著』冨山房、昭和3年刊）、増淵勝一氏前掲論文（20）、松村博司氏著『栄花物語全注釈（三）』（角川書店、昭和47年刊）二〇〇頁、同氏他著『栄花物語・紫式部日記』（鑑賞日本古典文学第十一巻、角川書店、昭和51年刊）一〇五・一〇六頁など参照。

（29）松本治久氏「同じたね一つすぢにぞおはしあれど――大鏡の主題と構想　その六――」（『平安朝文学研究』第三巻第七号、昭和50年12月。後に同氏著『大鏡の主題と構想』〈前掲（3）〉に収録）、森なおみ氏前掲論文（20）など参照。

（30）拙稿「『大鏡』「大臣列伝」における栄華の実現――外戚関係と子孫繁栄――」（『日本文芸論叢』第一号、昭和57年3月）参照。

（31）小松茂人氏前掲二論文（6）参照。

（32）拙稿（22）参照。

（33）（30）に同じ。

（34）藤岡作太郎氏著『国文学全史　平安朝篇』（大倉書店、明治38年刊。講談社学術文庫の『国文学全史　平安朝篇（四）』〈昭和52年刊〉による。）芳賀矢一氏前掲書（28）、松村博司氏前掲書（17）初版八九・九〇頁・改訂版九二頁など参照。

（35）（8）に同じ。

（36）松村博司氏前掲解説（6）、増淵勝一氏前掲論文（20）、松本治久氏前掲論文

(20)、丹羽正三氏「大鏡の栄花観――その道長賛仰の意味――」(『国語――教育と研究――』第十六号、昭和52年3月)など参照。

(37) これが『栄花物語』と異なる点である。

(38) 拙稿「『大鏡』構想の二重性をめぐって」(『文芸研究』第一一六集、昭和62年9月)参照。

(39) 増淵勝一氏前掲論文(20)参照。

(40) 今中寛司氏「『大鏡』の摂関時代史観」(古代学協会編『摂関時代史の研究』吉川弘文館、昭和40年刊)、山中裕氏「大鏡の歴史批判の性格」(『国文学』第十一巻第二号、昭和41年2月)、同氏「大鏡の藤原道長批判」(『文学』第三十五巻第八号、昭和42年8月。同氏著『平安朝文学の史的研究』〈吉川弘文館、昭和49年刊〉に再録)、拙稿(30)など参照。

(41) (5)に同じ。

(42) 山中裕氏「大鏡の歴史批判の性格」(前掲〈40〉)、相良亨氏「『大鏡』の思想」(竹内整一氏他編『日本思想史叙説 第三集』(ぺりかん社、昭和61年刊)など参照。

(43) 「皇后宮(娍子)ひとりのみすぢわかれたまへりといへども、それそら貞信公(忠平)の御するにおはしませば、これをよそ人とおもひまうすべきことかは。しかれば、たゞよのなかは、この殿(道長)の御ひかりならずといふことなきに、(娍子が)この春こそはうせたまひにしかば、いとたゞ三后(彰子・妍子・威子)のみおはしますめり。」(「道長伝」二一四頁)と記される。

(44) さて、ことしこそ天変頻にし、よの妖言などよからずきこえ侍めれ。かんの殿(嬉子)のかく懐妊せしめたまふ、院の女御殿(寛子)の、つねの御なやみのなかにも、ことしとなりては、ひまなくおはしますなるなどこそ、おそろしうゝけ給はれ。

(「藤氏物語」二四八頁)

(45) 松村博司氏著前掲書(17)初版一二〇・一二一頁、改訂版一二三〜一二五頁など参照。

(46) 橘健二氏校注・訳『大鏡』(日本古典文学全集20、小学館、昭和49年刊)三〇八・三一〇頁頭注参照。

(47) 林屋辰三郎氏「歴史と鏡」(『新訂増補国史大系月報』45、新訂増補国史大系第二十一巻上〈水鏡・大鏡〉付録、昭和41年5月。同氏著『歴史・京都・芸能』〈朝日新聞社、昭和53年刊〉に再録)参照。

(48) 拙稿「『大鏡』「太政大臣道長(上)」後半部の性格」(秋田短期大学『論叢』第三十七号、昭和61年3月)参照。

(49) 『尊卑分脈』にはもう一人、「左大臣高明室」と注記される女子が記載されるが、源高明室ということはあり得ない。

(50) 十七日戊申 昨日夜、左府(道長)北方産男子、(下略)(増補史料大成刊行会編『小右記一』〈増補史料大成別巻、臨川書店、昭和40年刊〉長徳三年十月十七日条、一三九頁)

宿候内間、丑時許従家有書、開見、只今有産者、ゝ(マヽ)(東京大学史料編纂所編『御堂関白記上』〈大日本古記録、岩波書店、昭和27年刊〉長保元年九月十九日条、三二頁)

(51) (38)に同じ。

(52) 子孫の高位顕官の数で対比すると、冬嗣が最高になる。場合によっては鎌足かもしれない。「大臣列伝」の権力者はすべて冬嗣の末裔であり、鎌足を始祖と仰ぐからである。しかし、「大臣列伝」にこの観点は採られない。また、両者の子孫の顕官はほとんどが万寿二年までに死去していることは言うまでもない。

(53) (30)に同じ。

(54) 保坂弘司氏著『大鏡全評釈』(学燈社、昭和54年刊)上巻一九一頁参照。

(55) 伴利昭氏前掲論文（1）。
(56) 増淵勝一氏前掲論文（20）。